



高校生の英作文は 3 年間でどう変わる？

1,086 人・26,399 本を追跡 「I」(私) 中心の記述から情報をまとめる英語へ

ポイント

- ① 高校生の英語ライティングが 3 年間でどのように発達するかを、1,086 人が 3 年間に書いた英作文 26,399 本（約 200 万語）を用いて追跡しました。
- ② 2 語以上からなる主語の割合は、高校 1 年の 15.5% から高校 3 年の 33.0% へ増加しました。
「I」などの代名詞中心から、より多くの情報を含む名詞句へ移行することが確認されました。
- ③ 主語の長さや構造は英語力の発達を捉える指標となる可能性があります。今後、英作文指導や自動評価の一要素としての応用が期待されます。

概要

英語学習者のライティング能力の発達は、これまで文全体の長さや使用されている単語の難易度などを中心に調べられてきました。一方、文の「主語」がどのように変化するかを、同じ学習者について長期間・大規模に追跡した研究は限られていました。

九州大学大学院言語文化研究院の内田諭准教授と東京学芸大学の臼倉美里教授は、日本人高校生 1,086 人が 3 年間に書いた 26,399 本の英作文を分析しました。その結果、主語は学年とともに長くなり、2 語以上からなる主語の割合は 15.5%、23.7%、33.0% と段階的に増加していることが分かりました。

さらに、主語は「I」などの代名詞中心の形から、形容詞、所有格、複合名詞、前置詞句などを含む名詞句へ移行しました。同じ生徒を追跡した分析でも、88.9% が高校 1 年から 3 年にかけて主語の平均語数を増やしていました。国際的な言語能力の指標である CEFR (※1) による作文のレベル別の分析では、B1 以降で主語の長さのレベル間の差がより明確になりました。

本研究は、主語という明確な位置に注目することで、学習者が「自分について述べる」表現から「情報をひとまとまりにして伝える」表現へ発達する過程を数量的に示しました。主語の長さだけで個々の作文を採点することはできませんが、今後はライティング発達の把握や自動評価を支える複数指標の一つとして活用できる可能性があります。

本研究成果は、英語ライティング評価の国際学術誌「Assessing Writing」に 2026 年 9 月 22 日（火）（現地時間）にオンライン掲載されました。

研究者からひとこと：

同じ高校生を 3 年間にわたって追跡した、これほど大規模な英作文データは非常に貴重です。そのデータから、学年が上がるにつれて文の出だしが変わる様子を数量的に確かめることができました。長い主語を書けばよい、ということではありません。伝えたい情報に応じて、多様な主語を使えるようになることが重要です。（内田諭）

【研究の背景と経緯】

英語では、文の主語を明示することが基本です。一方、日本語では、文脈から分かる主語を省略することが多くあります。この違いは、日本人学習者の英作文にも影響すると考えられてきました。従来研究では、日本人学習者が「I」や「I think」を多く使うこと、英語力が上がるにつれてその使用が減ることなどが報告されています。

また、近年の第二言語ライティング研究では、上級者ほど従属節を増やすだけでなく、名詞句の内部に情報を組み込む傾向があることが注目されています。しかし、名詞句の中でも「文の主語」という特定の位置だけに注目し、同じ学習者を高校3年間にわたって追跡した大規模研究はほとんどありませんでした。

背景には二つの課題があります。一つは、3年間継続して同じ学習者の作文を集めたデータが少ないことです。もう一つは、誤りを含む学習者英文から主語だけを大量に取り出す方法が十分に整備されていなかったことです。

そこで本研究では、株式会社新興出版社啓林館が提供するオンライン英作文添削サービスから得られたデータを利用しました。2020年4月から2023年3月まで継続して利用した49校から、各学年で3本以上の作文を提出した1,086人を抽出しました。課題は123種類で、身近な話題から社会的テーマまでを含みます。

【研究の内容と成果】

まず、学習者英文から主語を自動抽出するプログラム「SubjEx」（※2）を開発しました。人手で確認した200文との比較では、主語抽出の正確さは93.5%でした。これにより、26,399本の作文から主語を大規模に分析できるようになりました。

学年	抽出した主語数	主語の平均語数	2語以上の主語
高校1年	30,606	1.320	15.5%
高校2年	81,971	1.545	23.7%
高校3年	46,109	1.926	33.0%

表1 高校3年間における主語の長さの変化。主語数は分析対象として抽出された件数

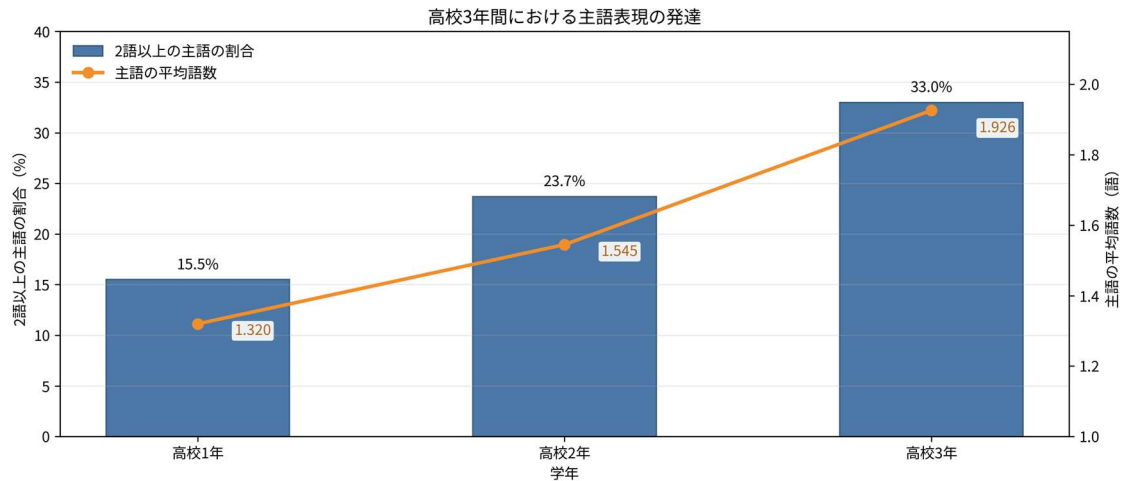
主語の平均語数は、高校1年の1.320語から高校3年の1.926語へ増加しました。特に分かりやすいのが、2語以上からなる主語の割合です。高校1年では15.5%でしたが、高校2年で23.7%、高校3年で33.0%となりました。

この変化は、一部の生徒だけが長い主語を書くようになった結果ではありません。同じ1,086人を個人単位で比較すると、88.9%の生徒で高校1年から3年にかけて主語の平均語数が増加しました。ただし、伸び方には個人差があり、学年が上がるほど生徒間の違いも大きくなりました。

主語の「中身」にも変化が見られました。高校1年では「I」などの単独の代名詞が多く使われていました。高校2・3年になるにつれて、形容詞による修飾、所有格、複合名詞、前置詞句を含む名詞句が増えました。語彙面でも一人称の主語が減り、「the number of ...」のように情報をまとめる表現が増えました。

英語力との関係を見るため、作文をCEFRに基づくレベルに分類して比較しました。その結果、主語の平均語数はレベルが上がるにつれて増加しました。初級レベルであるAレベル内では差が小さい一方、中級レベルに位置付けられるB1以降では違いがより明確になりました。これは、主語の作り方が初級から中級へ進む際の変化を捉える一つの手がかりになる可能性を示しています。

【参考図】



【今後の展開】

今回の結果は、主語の長さや構造が、英語ライティングの発達を捉える分かりやすい指標となり、自動評価にも活用できる可能性があることを示しています。今後は、作文全体を評価する既存の指標と組み合わせ、学習者の変化を長期的に把握する方法や、自動ライティング評価への応用を検討します。

一方、主語が長ければ文章の質が高い、という意味ではありません。本研究は日本語を母語とする高校生を対象としており、課題の種類も複数含みます。今後は、異なる母語の学習者や、意見文・物語文などジャンルを統制したデータでも同様の傾向が見られるかを検証する必要があります。

教育面では、「長い主語を書かせる」ことを目的にするのではなく、伝えたい内容に応じて名詞句に情報を組み込む方法を指導することが考えられます。その結果として、学習者がより長い名詞句を主語とする文を生成できるようになる過程を可視化することで、さらに具体的なライティング指導への示唆につながることが期待されます。

【用語解説】

(※1) CEFR (ヨーロッパ言語共通参照枠)

・・・外国語の運用能力を A1、A2、B1、B2、C1、C2 などの段階で示す国際的な枠組み。

(※2) SubjEx

・・・本研究で開発した、英文から文法上の主語を自動抽出し、その長さや構造を分析するプログラム。

<https://github.com/discoursemarker/SubjEx/>

【謝辞】

本研究は JSPS 科研費 (JP23K21949、JP24K00090) の助成を受けたものです。また、本研究は株式会社新興出版社啓林館との共同研究の成果の一部であり、分析には同社が提供するオンライン英作文添削サービスを通じて得られたデータを使用しました。

【論文情報】

掲載誌: Assessing Writing

タイトル: Developmental Trends in Subject Length and Complexity in Japanese Learners' English Writing

著者名: Satoru Uchida, Misato Usukura

DOI: 10.1016/j.asw.2026.101124

【お問合せ先】

<研究に関する事>

九州大学 大学院言語文化研究院 准教授 内田 諭（ウチダ サトル）

TEL：092-802-5721 FAX：092-802-5721

Mail：uchida@flc.kyushu-u.ac.jp

<報道に関する事>

九州大学 広報課

TEL：092-802-2130 FAX：092-802-2139

Mail：koho@jimu.kyushu-u.ac.jp

東京学芸大学 総務課広報・基金室

TEL：042-329-7116 FAX：042-329-7114

Mail：kouhouty@u-gakugei.ac.jp